

2017年1月24日

立教大学国際学術研究交流制度
2017年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

受入 教員	所属・職	現代心理学部・教授
	氏名	小口 孝司
受入学部・研究科・研究所		現代心理学部
招へい 研究員	所属・職	Lecturer, Faculty of Business, Economics and Law, The University of Queensland 協定の有無：無 所在国：オーストラリア
	氏名	Pi-Hsuan Monica Chien
招へい期間		2017年12月11日～2017年12月22日（12日間）
研究経費		322,491円

2. 滞在中の活動

来日日および離日日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例) ○○ついて研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

年月日	活動内容
2017年12月6日	来日
12月13日	講演タイトル：Turning 17 Days into 17 Years -Leveraging the Olympics and Creating Legacy for All- 会場：N324 参加人数：8名
(12月14日)	(日本交通公社にて講演)
12月19日	講演タイトル：Using the Golden Sport Years to Advance Tourism - Making Japan a Winner- 会場：N324 参加人数：17名
12月22日	招へい期間終了（私費にて滞在を延長し、2018年1月6日離日）

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

12月13日の講演では、本学教員、本学大学院生、他大学研究生を対象にして、英語で講演を行った。オリンピックを契機として、日本の観光をどのように発展させていくのかをオーストリアの例などを取りながら、解題した。演者と聴講者との間での積極的な議論が交わされた。当該テーマについての有意義な示唆が得られた。

Chien 先生は、台湾出身であり、英語を母国語としない方でありながら、オーストラリアにおいて就労しながら学士・修士・博士と研究を進めてこられた経歴も併せてご紹介いただいた。そうした大変な苦勞を重ねて、現在は大学の世界ランキングにおいて60位ほどであり、またオーストラリアの中にあってもトップ4になる大学の教員を務められているという姿は、大学院生たちにとってとてもよいロールモデルになったと思われる。

12月19日の講演では、本学教員、本学大学院生、本学学部生を対象にして、英語で講演を行った。要所要所で、日本語で要約をしながら、進めていった。講演では、特にインバウンドの問題について、オーストラリア、その中でもクイーンズ大学があるクイーンズランド州の様子を紹介した。そうした講義の後に、Kahoot!のスマホを用いたゲーム形式でクイズを出して、学生たちの興味を高め、理解を深めていた。学生たちにとっては普段専門の授業を英語で講義されることはほとんどないが、Chien 先生の明瞭で、ゆっくりとした発音、図表の多用などによって、英語での学修を体験することができた。また、受入教員にとっても、学生たちのスマホを用いて、ゲーム形式に授業の理解をチェックし、授業への集中を高める教授方法は非常に参考になった。今後の授業に生かしていきたい。

12月14日は、学外であるが、日本における観光研究の一つの大きな拠点である、日本交通公社において講演をして、日本の研究者との交流が図られた。

また、滞在中には、学内外において Chien 先生と共同研究の討議を数回重ねた。日本のインバウンドに関する研究であり、今日的な意義が非常に高い。来年度の科研費研究に応募したいと考えている。

さらに、本学経営学部の辻洋右准教授とのコラボレーションも進んでいるようである。今回の来日が、現代心理学部だけでなく、他学部の先生方、さらには学外の日本の研究者との連携の契機となったことは非常に意義深いことであると思われる。

最後に、本招へいをご承認くださった立教大学の関係者の方々、また実際の招へい業務を行ってくださったリサーチ・イニシアティブセンターの方々に厚くお礼を申し上げる。